

「ああ……気持ちがいい……」

夏が到来して間もない7月下旬。
昼間は日差しが差し込み、夕方になってもまだ暑い。
そんな中、俺は公園のベンチで昼間から
缶ビールをかつくくらいながら、一人たたずんでいた。

学生達はそろそろ夏休みに差し掛かった頃だろう。
かくいう社会人の俺も、長い夏休みをもらった。
それも、無期限の夏休み。つまり、クビである。

無気力で何もやる事がなくなつた俺は、特にすることもなく、
一日中酒を浴びながらここでボーツとしていた。
ロング缶のビールも、既に5本目だ。

公園で遊ぶ子供たちや保護者からは怪訝そうな目で見られ、
近寄って「ようともしなかつた」
近くにあるコンビニの店員も、何度も酒を買いに来ている俺を
見て不思議に思っただろう。

「……まあ、もうどうでもいいか」

もう派手に何かをやって、散ってしまおうか。
そんな答えばかりにたどり着く。

そして、ビールが7本目に差し掛かった頃。
あたりはすっかり日が暮れていた。

「……………」

そんな俺がずっと気になっていた事がある。
同じくそのベンチにうつむいて座っている、少女の姿だ。
日が暮れる頃、公園で遊ぶものは皆帰っていったが、
彼女だけは一人帰らないで、ああやってずっと座っている。

「……………」

家に帰るような素振りもない。

親の帰りが遅いのか？…それとも、家出か？

この公園は夜は街灯があまりついていなく、いつも暗い。
節電しているのだから、それだけに夜は危ない場所だ。
女の子一人こんなところで居るのは物騒だ。

短い髪を二つに結んでいて、とても可愛い顔をしている。

さっきから俺の背後で悪魔が囁きかける。
誰も見ていないなら、いつそのこと家に連れて帰ろうか？

そんな俺の視線に気づいたのだろうか。
少女とふと、目があう。

「…家に帰らないのか？」



俺はそう、無意識に問いかけていた。

「…帰らない。帰りたくない」

「そんなんじゃないや、親が心配するだろう？」

「私なんて居なくても誰も心配しない」

「…そうか」

「おじさん」「そ、」でずっと何してるの?」

「…別に、何も?それに、おじさんじゃない。お兄さんだ」

まだ27だぞ?そ、」までじゃないっつーの。



「それじゃあ私と同じだね?...お兄ちゃん」

「.....ああ、そうかもな」

おじさんは嫌だが、こんな子にお兄ちゃんと呼ばれるのも
少々ドギマギしてしまう。
しかし少女から話しかけてくるなんて、これは好都合だ。

「…今日は」「で寝るつもりか？」

「うん…。ど」「にも行く所ないから…」

「金も持ってないんだろ？…家、来るか？」



「お兄ちゃん、お家あるの？」

「…ああ」

金が尽きるまではな。

「…泊めて欲しい」

少女の即答ぶりに、こちらが拍子抜けする。相手は男だぞ？少しは警戒心もてよ。それとも、それも覚悟してんのか？

「…じゃあ来いよ。」の近くだから」

「うん」



「そーういや名前聞いてなかったな。名前は？」

「…マナ。お兄ちゃんは？」

「…サトシだ」

「こうして、俺はあっさり彼女を連れ出すことに成功した。」

「古いおうちだね」

「文句言っなよ」

「ここは場所のわりに家賃が安い。
しかも、バストイレ別の物件である。
古さを除けば、中々お目にかかれない物件だ。」



「お兄ちゃん、一人暮らしなの?」

「……ああ」

「一人暮らしの家に女の子を連れ込むなんて、危ない人……」

「な……なんだ？誰か居ると思ってたのか？」

「……思ってたなかった。お兄ちゃん独身ぽかったし」

当たってはいるが、見透かされていたのがなんか悔しい。というかやっぱり分かっててついてきたんだな。

「……飯食ってないんだろ？カップ麺ならあるぞ」

「……絵に描いたような男の一人暮らしだね。すごく不摂生……」



喧嘩売ってんのか？w

「一人暮らしには何かと必需品なんだよ。簡単だしな。……で、どれ食う？」

俺は棚にあったカップ麺を幾つか見せる。

「何でもいい」

「じゃ、「れな」

「うん」

夕飯を食べて一段落つき、再度ビールをかつくくらいながらテレビを見ていると、横で座っていたマナが「こちらの服の裾を引っ張る。」

「お風呂、入らないの？」

「風呂？俺は別に」

「…外に居たのに汚いよ？」



「いいんだよ。男はこれくらい汚い方が。…入りたきゃ入れよ。風呂はそこだから」

突き当たりにある風呂場を指さす。

「…うん」

マナは一人で風呂に向かった。

「なんか調子狂うな…」

いつものように何くわぬ顔でテレビをつけて見るも、テレビの内容が全く頭に入っていない。俺以外の人間が一人居るだけでこんなにも落ち着かないとは。やっぱりあの子を意識しているからか？

いや。それもあるだろうが、勢いで家に連れてきたとはいえ、俺は大胆なことをしてしまっただの。

もつと言えば、更に突っ込んだ事までしてやろうかとも考えていたのだが、流石にそこまでは怖くてする気が起きなくなった。

「俺は小心者だな…」

「お風呂上がったよ」

「ブツ!？」

思わずビールを吹きこぼしてしまった。
なんて大胆な格好をしてやがるんだ。

「服着ろよ、服！」

「服汚れてたし、代えの服もないから……」



「しょうがねえなあ。洗濯してやるから、それまで
俺の服でも着てるよ」

「うん」

全く……。調子が狂うな。

深夜。

マナには隣の部屋を使わせた。

結局、特に家に連れ込んだだけで何もしなかった。
あんな姿を見てムラムラしたが、到底襲う勇気がなかった。

何か落ち着かなかったたので、結局俺は風呂に入った。
少し酔いも冷ましたかったのだ。

しかし酔いが覚めることがなかった。
むしろいい感じに回ってきて、程よく眠くなってきた。

「……ん」

ゴソ…ゴソ…。

なん…だ…？遠くで何か物音がするような。

「確か、「こ」を…「う」だったよね…」

「ちゅっ…れろっ、れろっ…」

「ん…？」

あれ？なんか気持ちいいな…

「ちゅっ…れろっ、れろっ…」

股間が熱くて…ん…股間？

目を開けた瞬間、俺は目の前の光景を疑った。

「あ、起きた…」

「お、お前…何やってんだ？」

「レロツ…レロツ…お礼…」

レロツ

レロツ

「お礼って…お前…」

自分がどういふ「レ」として居るのかわかってんのか？」「

「泊めてくれたお礼に、「レ」いふ「レ」としなくちゃって
ネットに書いてあったから…。違った？」